

舞台、台本、翻訳へ：英語・バイリンガルKyogenへの挑戦

龍谷大学教授 ジョナ・サルズ

本講演は、公演活動や出版のために英語や諸外国語に翻訳された狂言について論じる。まず、狂言のテキストの特徴について歴史的な文脈から論じる。

1. 狂言台本は、能と同様、何者によって書かれたか明らかでないが、その内容は実演と鍛錬の場を通じ、数世紀もの間受け継がれてきた。
2. 長期にわたる順応・競合・地理的移動および秘匿性の結果、台本の内容は流派・劇団ごとに変化した。
3. 極度に様式化されたとはいえ、テキストの多様性や即興性については、現在も議論の余地がある。

出版・公演に向けた狂言の英訳の過程においても、上記のような多様性が見られる。英訳の検討から以下の事実が明らかとなった。

1. 最初の狂言の英訳は1880年代に現れた。
2. 台詞のアクセントを文章上に表現するため、翻訳者は多彩な表記を用いている（例 “- “ “...” “Yesss” “YES!”）。
3. 文化的習慣、登場人物の人間関係および詩文は、注意深く解釈する必要がある。

狂言は、およそ100年間にわたって英語で演じられてきた。こうした中で、翻訳家は以下のような問題に直面することになった。

1. 日本語と英語の語順の違いから、アクセントの位置が変化する。
2. ジェスチャーを伴う擬音語・擬態語の翻訳（例 Sara-sara-sara; Dobun）。
3. 狂言の波のような発声法に対応する、同等の発声法の発案。

英語・バイリンガル狂言公演に向けた挑戦を、以下の例を用いて論じたい。

1. ポートランド州立大学 Julie Iezzi
2. ハワイ大学 Laurence R. Kominz
3. Theatre of Yugen (サンフランシスコ) Yuriko Doi
4. 能法劇団 (京都) Jonah Salz

最後に、韻を踏んだバイリンガル狂言における翻訳家・演出家としての自身の取り組みについて紹介したい。